

深浦のあゆみ編集委員会編集・深浦町発行

『深浦町・岩崎村合併一五周年記念誌

深浦のあゆみ』

河西 英通

本書の魅力

本書は二〇〇五年三月に誕生した新「深浦町」のあゆみを全六章にまとめたものであり、A4判二七〇頁余に及ぶ。青森県西津軽郡に位置する深浦は近世弘前藩時代には九浦の一つとして、海上交通の要衝をしめ、近現代においては風光明媚な景観地として知られている。全編にわたり魅力的な叙述があふれるが、なんといっても「第五章 新深浦町の誕生」の「第一節 合併への道」深浦町と岩崎村の選択と決断」が読ませる。新町誕生までの道筋がいかに苦難の連続であったかがわかる。読者にはまずここから読まれることをお勧めする。

新「深浦町」は青森県西津軽郡の深浦町と南接する岩崎村が合併すること誕生した。二〇世紀末から今世紀初めにかけて基礎自治体の行財政基盤確立のため全国的に市町村合併が推進される。自治体数一〇〇〇を目標にしたいいわゆる「平成の大合併」である。新「深浦町」はその産物であるが、さかのぼると一九五〇年代のいわゆる「昭和の大合併」の際に深浦町（一九二六年町制施行）と南北に接する大戸瀬村、岩崎村の三町村による合併の動きがあった。深浦町は積極派だったが、大戸瀬村

は北隣の鰯ヶ沢町との合併を、岩崎村は県境を越えて秋田県能代市との合併をめざしていた。この背景には両村の生活圈・経済圏が深浦町方面ではなく、その逆方向に広がっていたことがあった。岩崎村では能代市との合併のために、府県統廃合問題と関連して青森・秋田両県の合併論者さえいたという。

結局、合併協議から岩崎村が離脱することで、深浦町と大戸瀬村によつて一九五五年七月に「深浦町」が生まれる。「昭和の大合併」は地域にさまざまな混乱・軋轢・対立を惹起したが（中園裕編『青森県 昭和の町と村 大合併で消えた自治体の記録』デリー東北新聞社、二〇二〇年、参照）、深浦町と大戸瀬村の場合、分町運動などは見られなかった。しかし、それから半世紀後、「平成の大合併」運動のなか、西津軽郡で新たな町村合併構想が検討されはじめる。それは大きな市域創出を意図したものであった。

新「深浦町」誕生のドラマ

事の発端は二〇〇二年二月の西北地域の一四市町村長による「西北五市町村合併共同研究会」の設置である。中心自治体である五所川原市をはじめ、西津軽郡と北津軽郡の一市町村が参加し、のち鰯ヶ沢・深浦両町と岩崎村が加わり、板柳町（北津軽郡）を除く一四市町村が勢ぞろいした。いったいこのまま進んでいたならば、どれほど広大な市域が生まれたことであろうか。しかし、数か月後に西津軽郡八町村は五所川原主導の西北五大合併構想に反対の意向を示し、「西津軽郡八町村合併研

研究会」を設置することで、「西北五市町村合併共同研究会」は解散・廃止となる。〈大西北五市〉構想は消えた。

では分離した西津軽郡八町村が一体的な合併を求めたかといえば、そうではない。新田地区（木造町と森田・柏・稲垣・車力四村）と西岸地区（鰯ヶ沢・深浦両町と岩崎村）に割れた。新田地区にしてみれば西岸地区まで含んだ場合、中心市街地の構成が困難になると見込んでいたし、西岸地区は西岸地区で独自の合併構想を進めていた。二〇〇二年はさまざまな思惑を秘めて多様なサイズ・組み合わせの合併構想が陰に陽に展開した年である。

地域における合併構想が目まぐるしく浮沈したのは、「平成の大合併」が自主的な市町村合併推進を旨としていたからであり、改正合併特例法によって、地方自治法が市制施行に人口五万人以上を要件としたのに対して、「三万人市特例」が設けられ（二〇一〇年の特例法廃止後、人口要件は五万人以上に復帰）、二〇〇五年度までは合併特例債などの財政措置がなされたからである。合併促進の特例措置は期限が迫っていた。二〇〇二年九月の「西津軽郡町村会理事会」が合併協議を先送りしたことで、西津軽郡の一体的合併の可能性は消滅する。この後、新田地区は「木造新田任意合併協議会」を結成して三万人市をめざし、二〇〇五年二月に木造町に市役所本庁を置く「つがる市」を発足させた。

残された西岸三町村はどうなっただろう。ここからがドラマである。二〇〇二年一月に設置された「西海岸三町村合併推進協議会」はいわば非・三万人市構想に立っていた。三町村の合計人口は三万人に届かなかったが、たんなるソロバン勘定からの致し方ない結論だったのでは

ない。深浦町長は「日本国中が市になる必要はない」と述べていた（一七六頁）。その意味については後述したい。二〇〇三年の夏、三町村による法定協議会設置が合意され、合併までもう一步であった。

ところがここに来て、鰯ヶ沢町が弘前市との合併案を持ち出した。同年四月の「津軽南地域市町村合併協議会」において、弘前市長が西岸三町村の参加・受け入れを提案したのである。弘前市は津軽南地域にはない海と港に大きな関心を示していた。これには鰯ヶ沢町内における弘前合併論の抬頭も働いていたようだが、深浦町は三町村合併論に固執した。残る岩崎村は二〇〇四年一月に「西海岸三町村合併推進協議会」からの離脱、法定協議会への不参加を明らかにする。この結果、協議会そのものが解散した。岩崎村離脱の背後には、三町村合併のメリットが弱いこと、本庁舎移転によるいっそうの過疎化などに加えて、「昭和の大合併」の際にも見られた秋田県能代市への接近もあった。

本書の醍醐味は深浦町と岩崎村の合併、新「深浦町」誕生のプロセスを、青森県内のみで解明するのではなく、県境をまたいで辿っている点である。岩崎村はすでに二〇〇一年七月発足の「能代山本地域市町村合併に関する勉強会」にオブザーバーとして参加しており、二〇〇二年二月の「能代山本広域合併市町村長談話会」に出席して、能代山本地区で任意合併協議会が立ち上げれば参加したいと表明していた。つまり、岩崎村はある意味で〈二股〉をかけていたのである。しかし、これは非難されるべきことではなからう。現実政治のリアリズムであり、自治体をあずかる者のタクティクス（戦術）である。さらに本書も指摘しているように（一八〇頁）、当時、青森・秋田・岩手の三県をベースとした

北東北広域連携や三県合体・東北州の構想、あるいは北東北学の提唱などが盛んに行われていた。岩崎村の秋田県への編入はもとより、三県全体の行政地図が大きく変容することも検討されていたのである。

しかし、それはあまりに冒険的すぎたのかもしれない。結局、西岸三町村の合併構想は潰え去り、深浦町と岩崎村の二町村合併運動となり、二〇〇四年四月の合併協議会設立、六月の法定協議会移行、十一月の合併協定調印式を経て、二〇〇五年三月の新「深浦町」誕生となる。この間、新町名をめぐって問題もおこった。世界遺産となった白神山地の知名度の高さから、「白神町」が候補として躍り出たが、秋田県能代山本地区の合併新市の名称にも「白神」があがった。結局、自然環境保存の観点から、両地域ともに「白神」を除外することになり、現在の「深浦町」と「能代市」に落ち着く。

長々と新「深浦町」誕生のドラマを追ってみた。ぜひ読者のみなさんにはスリリングな展開に寄り添っていただきたい。地方自治体にとって、書き辛いことであり、大声で語るのはむずかしい。しかし、本書は果敢に誕生物語に挑んだ。「合併に至るまでの様々な選択過程を明らかにし、最終的に合併を決断した背景について考察することが歴史を検証する行為につながるのです。」（一八九頁）ここに執筆者の確固たる信念が語られている。その意義を真正面から受け止め、誕生（秘話）をオーブンにした深浦町の度量の深さに敬意を表したい。

地域の歴史をどうとらえるか

新「深浦町」の誕生過程は西北地域の大合併が次第に「縮小」（一七五頁）していった足跡のようにも、国の市町村合併推進の渦に巻き込まれて右往左往した変転の歩みのようにも見えるが、地域社会が純化していった過程にも見える。「平成の大合併」の主眼が行財政の立て直しにあったことは明らかであり、当初、この地域の合併構想もその線を歩んでいた。しかし、市町村合併は数合わせでなんとかなるようなものではない。やはり、最終的には歴史や文化などのつながりが物を言う。このことを合併協定調印式で岩崎村長は、合併は「両町村の長い歴史と文化、この地域の資源、特性を認識しあったことに大きな意義があった」と述べている（一八六頁）。前述した「第五章 新深浦町の誕生」「第一節 合併への道」深浦町と岩崎村の選択と決断」以外の各章・各節は、その歴史・文化・資源・特性を余すところなく叙述している。紙幅の関係から、それらを縷々紹介・コメントすることは出来ない。章・節のタイトルのみ掲げておこう（副題は略）。

第一章 新深浦町誕生までの軌跡

第一節 近世津軽の中の深浦

第二節 行政区画の変遷と深浦

第二章 昭和の深浦町と岩崎村

第一節 大戸瀬村があった頃

第二節 深浦十二湖県立公園の指定

第三節 開拓の地

第四節 大火と復興

第三章 国定公園の町へ

第一節 生活環境の向上をめざして

第二節 五能線沿線の集落

第三節 進む築港、変わる海岸

第四節 津軽国定公園の誕生

第五節 県立深浦高等学校の誕生

第四章 世界自然遺産白神山地の麓

第一節 変わりゆく役場と歴史的景観

第二節 「西海岸」のふるさとづくり

第三節 「とる漁業」から「つくり育てる漁業」へ

第四節 過疎化・高齢化といのちを守る取り組み

第五節 世界遺産「白神」とともにあゆむ

第五章 新深浦町の誕生

第一節 合併への道

第二節 学びの拠点の再編

第三節 深浦の芸能文化のあゆみ

第四節 深浦町の開発の取り組み

第五節 食による観光まちづくり

第六章 希望を未来につなぐ

第一節 町長らの思い

第二節 深浦町民憲章の制定

本書の特色として、大量の写真掲載と聞き取りの活用があげられる。

巻末に一覧が載っているが、写真は三七五点にのぼる。一頁に一枚以上となる。この種の刊行物では極めて豊富な掲載といえよう。それは「編集を終えて」に記されているように、写真が歴史資料だからである。近現代ならではの貴重な資料といえる。特別で大仰な記念写真にとどまらず、日常の一コマを写したスナップ写真が貴重な語り部となる。聞き取りからも歴史像の多様性がうかがえる。長慶平中学校の校長を務めた森山嘉蔵氏は子どもたちのふるさと意識が薄かったことを回想している。長慶平が開拓地であったため、保護者たちにふるさと意識がなく、子どもたちは卒業後外へ出ることを当然視していたという（四〇頁）。ステレオタイプのふるさと論は通じない。あるいは、深浦高等学校の創設期に請われて教師となった田寛寺住職の海浦暁観氏によれば、教師と生徒はお互いに教え学び合う関係であったという（九七頁）。

こうした特色に評者は民俗学者の宮本常一や写真評論家の西井一夫がおこなった歴史の読み取り方を想起した。

本書は地域史を叙述する上での多くのヒントを明示しているが、もはや触れる余裕はない。個人的にも思い出深い深浦の姿にふれることができた。広く読まれることを期待したい。

（A4判、二七四頁、二〇二一年三月三十一日、深浦町、税込町内千円・町外二千円）

（かわにし・ひでみち 広島大学森戸国際高等教育学院特任教授）